本願寺教学伝道研究所

K A S H - C O

論点:自分らしい葬儀

教学相談メモ:毎日が生前葬?

東京支所だより:書店に聞く最近の仏教書

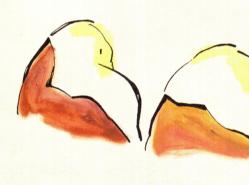
写真/御影堂『常灯明』撮影/野呂 靖題字/親鸞聖人真蹟『大御前宛書状』(本願寺所蔵)より

恩愛常なく、 合会離るるあり。

『遊行経』より







愛しい者はいつまでもおらず、 出会うものには別離がある。

葉を告げられました。 ですが、釈尊は「悲しむべきではない」と言い、この言 は、悲しみのあまり、叫んだり、倒れたり、取り乱すの ない事を弟子たちに伝えます。それを聞いた弟子たち の様子、釈尊の葬儀のあり方などが説かれた経典です 八十歳の釈尊は、旅の途中で、もう人生の先が長く 『遊行経』は、釈尊の入滅直前の説法や、弟子との別離

抑えることは難しかったようです。私たちも、身近な ちであっても、釈尊の入滅を目の当たりして、感情を 得、修行に励んできた事でしょう。そのような弟子た い感情の発露と言えるでしょう。 ます。それは、簡単には断つこと、離れることができな 人との別れを経験するとき、悲嘆にくれることがあり てきた「無常」という事です。弟子たちもこれをよく心 「常なく」というのは、釈尊が多くの場面でおっしゃっ

脱せし」(『高僧和讃』龍樹讃 第十首目『註釈版聖典』五八〇頁) はなはだつきがたし 念仏三昧行じてぞ 罪障を滅し度 と、お示しくださっています。 この事は親鸞聖人も「恩愛はなはだたちがたく 生死

昨今の葬儀不要論の中には、釈尊の教説とは違った方 説かれています。まさにそこで、悲しみ、嘆くものたち 向に進んでいる論調があるように思えてなりません。 のために、法が示されるのです。このように考えた時、 仏典は多くの箇所で、死別の悲嘆に寄り添うように

豊(教学伝道研究センター研究助手)



真宗に出遇われたご縁は?

はどこの家でもこんなもんでした。 早くこないかなと思っていた。安芸門徒 勤 を食べさせてもらえないから、最後にお も覚えていた。 もの時、 正信偈 『めする『御文章』の「あなかしこ」が していたから、 安芸門徒に生まれたことです。子ど 親がずっと「正信偈」をおつと 」を覚えていた。短い お勤めを終えないとご飯 小学校に行く頃には 『御文章』

思っていました。あまり良い動機ではな いね。(笑 い。あんなお坊さんになりたいなぁ、と 行かないと本堂が一杯になって会えな にお参りになるので、二時間くらい早く が法話をする時には 院 長であった高松和上に出会いました。 方は理想のお坊さんですね。和 島 仏教学院に入ったとき、当時の 村中の人がお寺 Ŀ

ですか? どのようにして真宗を学ばれ たの

とは良い勉強になる ずっと勉強をした。教えるということ た。講義の前日は逮夜参りを調整して 勉 講義をしようと思ったら、最低三 は、それくらいしないといけない。一時 中 強しないといけない。 央仏教学院の講義を受け持ちまし 真 宗学の恩師、 桐渓先生の だから教えるこ 代 わりに 一倍は 間

もサンスクリット語もありますが た。『大経』『阿弥陀経』にはチベット語 経 概論の講義を受け 持ちまし 辞 書

話

すよ。 でも分からないことがでてくる。学問と いうのはそういうものです。デカルトの は梵英と蔵英しかない。調べればいくら ただ学びて無知を知るのみ」は名言で

残っていることは? 桐渓和上からお聞きになった心に

宗、それが平生業成です。

らい充分に間にあっているのが浄土

真

H

大事 とです。坊さんの一番大切なことは聴聞 坊さんも同行もない、 昧に入り聴聞なさっておられる。だから 寿経』では、 であって、話すことではないですよ。まず 職 浄 が聴聞しないといけない。『大無量 。聴聞を怠ったら駄目なんです。 土真宗は聴聞に極まる」というこ お釈迦様が大寂定弥陀三 聴聞することが

住

ろ「わしは聴聞もできんようになった」 います。ところが、「和上が参っていたら た。この聴聞する姿勢が大事なんです。 といって泣かれたそうな。それからは \$ はいない。いつも総会所に参っていたとい 俗 するよういわれたんです。そうしたとこ 布 服 のだから、長女が和上に聴聞を遠慮 教使が話をしにくい」と職員がいう 足 で柱の影に隠れて聞くようになっ 利義山和上ほどのありがたい学者

できます 後 受学の者 励 ま しの お 言葉を頂

聞書」註釈版1280頁)といわれる。真宗の といふことはあるまじき」(『蓮如上人御 は臨終の法話だから、いまが終いでも ります。蓮如さんは「仏 浄 土真宗の肝はいつでも 法には明 臨終法話 法 H

にもいのちがない、それでも間に合うく ちがないという人から、「 ことなんです。今晩か明 てくれ」といって応えられないようなら、 間にあっている。それが平生業成という 侶は袈裟をとらないといけない。 日の朝までいの 法話を聞かせ 明

ころが助かる場所。 ろ。わしがどこに居るか。 い。「いま」といったらわしが居るとこ 「いま」を説いている。死んでからではな 頁)と「いま」が二ヶ所でてくる。仏法 ころに「いまことに方便の真門を出 いま遇うことを得たり」(註釈版132頁)、三 には、「総序」の終いに「遇いがたくして いつでも「いま」ということ。 かるが先に届いて居るんです ない「いま」です。ですから『教行信 たら平生にならない。平生は昨 ないといけない。平生といったら「いま 転入の二十願から十八願の 浄土真宗では平生業成を明らかにし 選択の願海に転入せり」(註釈版413 本願成就だから、 わしが居ると 明 転入のと 日になっ 日でも 助

願

て、

僧 ね あ るまじき」、いま助かる法です 侶の資格はない。その臨終とは 浄土 から。 一真宗では臨終法話ができないと 「仏法には明日といふことは いま から

責 竹本 了悟 教学伝道研究センター 研究員

文

[・]高松 悟峰(1866-1939)…本願寺派勧学。真宗學寮を創設。真宗學寮初代学頭。

[・]桐渓 順忍(1895-1985)…本願寺派勧学。龍谷大学教授、龍谷大学名誉教授を歴任。 ・足利 義山(1824-1910)…本願寺派勧学。大教校教授、広島の博練教校総監、大学林綜理を歴任。

□□「浄土真宗の救いのよろこび」

拝読のススメ

信心のたしかさと、そのよろこびが表されています。名号のよび声を聞きひらいたところに定まる今回は「このよび声を聞きひらき」からの第二段。



私の心にともります。如来の救いにまかすとき

名号のよびごえ

でしょう。
でしょう。
のいたらきはいったいどこにあるのけ、はたらき続けてくださっています。しけ、はたらき続けてくださっています。しいがし、そのはたらきはいったいどこにあるのがし、そのはたらきはいったいど

敗いのはたらきがあるといわれても、そ「救われているなんて思えないよ」「はたらきなんか、見えないじゃないか」

も知れません。

も知れません。

ます。 らきは確かに私たちの元へ届けられてい しかし、阿弥陀如来の願いとそのはた

念仏する身へのお育て

無阿弥陀仏」のお名前が現れています。き、私の口からは、尊い功徳に満ちた「南ひと声「南無阿弥陀仏」と声に出すと

私たちは本来、お念仏などするはずのなかった身です。それがどうしてお念仏なると、この私をお念仏する身にまで育みると、この私をお念仏する身にまで育みると、この私をお念仏するはずのがあったことに気づかされます。

れ、仏さまの教えへと導びかれてきたのでの前に座った懐かしく温かい思い出であるかも知れません。私たちは、それらさまざまも知れません。私たちは、それらさまざまなできごとの中で、念仏する身へと育てらなできごとの中で、念仏する身へと高い出であるかい人できごとの中で、念仏する身へと高い出であるから、お仏壇

はないでしょうか。

今、ひと声「南無阿弥陀仏」とこの口か今、ひと声「南無阿弥陀仏」とこの口から出てくださったご縁があり、たえずよび

永遠に消えない灯火―金剛の信心

らされ、出遇うことをいいます。けていた声があり、育くみ続けてくださっけていた声があり、育くみ続けてくださったいたはたらきがあったことを明らかに知るされ、出遇うことをいいます。

阿弥陀如来のたえることない「まかせ」とのよび声、「救い取って捨てない(摂取よ」とのよび声、「救い取って捨てない(摂取よ」とのよび声、「ないな救いのはたらきとの出い、造りあげる心ではなく、阿弥陀如来のなかな救いのはたらきと出遇うことのできたよろこびの心です。

讃えられています。めて堅く、決して壊されることのない心とられた信心を「金剛心」―すなわち、きわられた信心を「金剛心」―すなわち、きわられた信心を「金剛心」―

阿弥陀如来の確かな救いと、その救いに出遇えたよろこびの心(阿弥陀如来より与えら出逃えたよろこびの心(阿弥陀如来より与えらと、迷いの中にある苦しみ、悲しみの多いれたちの人生を照らし続けてくださるも私たちの人生を照らし続けてくださるもれたちの人生を照らし続けてくださるもれた。

中平 了悟(教学伝導研究センター 研究員)

―本願のいわれを聞く「仏願の生起本末」

すなはち本願力回向の 「信心」といふは、衆生、 「信心」といふなり。

(『註釈版聖典』二五二頁)

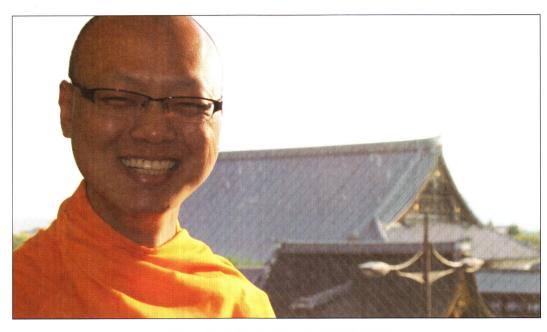
親鸞聖人は、「聞」と いわれを疑いなく聞いて いわれを疑いなく聞いて いくことであるといわれ は、阿弥陀如来の本願に は、阿弥陀如来の本願に は、阿弥陀如来の本願に なって与えられた信心 であると示されていま

体色の手頂は無月―確かな信心 ―確かな信心

、 「証釈版聖典」六七○頁) ともしびなり ともしびなり

とお示しくださっていいしずむ私たちにとってにしずむ私たちにとってにとっての大きなる灯火であるの大きなる灯火であるの大きなるが、無明の闇

界の仏教



現在、仏教文化研究所客員研究員。

来日。龍谷大学大学院仏教学専攻博士後期課程を経て、

れた。 せん。ですから僧侶は教えを簡単に分 かせない事をタニヨーさんは、教えてく 神的なものを提供するということで りやすく信者さんにお伝えします。精 信者さんは仏教の勉強の時間がありま を信者さんからいただきます。反対に、 物がありません。ですから物質的なもの 「僧侶は仕事をしないのでお金や食べ

を提供する)と法施(教えを説く)の相互関 タイでは、いわゆる財施(衣食などの物質

オレンジ色の袈裟を着た僧侶は、笑顔で 仰った。あまりに流暢だったので、思わず 「ショウワ?」と聞き返してしまった。 「生まれたのは昭和五十二年です」

る

係が、しっかりと成り立っているのであ

先に選んだのだろうか。

「日本は、大乗仏教ですね。大乗仏教

では、なぜタイを離れて、日本を留学

事を摂らない)という戒を守るためだ。 のを口にしない。不非時食(正午以後に食 仏教を学ぶために来日して十年になる。 工学を学び二十歳で出家。龍谷大学で 彼は、お昼の十二時以降は水以外のも タニヨーさんは、タイの大学では機械

私たちの知らないタイの仏教についてお 話を聞いてみた。 同じ仏教なのに明らかに違う仏教。

すことができればと考えています。」

また、仏教を日本語で学ぶことの意義

大乗仏教を学ぶ機会を得、大乗仏教の いということです。龍谷大学では日本の す。つまり、両方がそろってないと進めな だと、タイの師匠に教わった事がありま と上座部仏教は鳥の両翼のようなもの

素晴らしさを知りました。今後に活か

寺院数も、ちょうど日本の半分くらい 万六千の仏教寺院があるという。人口も 現在タイ王国は人口約六千万人、三

イの人々の生活に、お坊さんやお寺が欠 国民の95パーセントが仏教徒で、タ

す。 日本語に訳されていますね。日本語がわ 仏教学の勉強は難しいのです。仏教の学 を日本人である私たちに教えてくれた。 かれば、本当に多くの事が学べるので だと思います。その証拠に多くの仏典が 本の仏教学研究は、世界のトップレベル びと、仏教学研究は違うと思います。日 最後にもう一つ、日本に来た大切な理 「タイでは仏教の勉強はできますが、

由を教えてくれた。

タビューを通して、改めてわたしたち念 仏者のこれからを考えてみたい。 「世界の仏教」では、外国人僧侶のイン 立ちたいと思ったのです。」

「私は日本にいるタイの人たちの役に

金沢 豊(教学伝道研究センター 研究助手)

《第三回》東山・泉涌寺周辺を歩く

エリアに、浄土教の面影を探します。 季節ごとに装いを変える東山・泉涌寺周辺の 今回は、現在も多くの古刹がたちならび 意外な日本仏教の風景が見えてきます。 カメラと地図を片手に歩くと、 さまざまな文化をのこしてきました。 その教えは、人々の心に受け継がれ、 日本に仏教が伝えられて一五〇〇年。









徒歩十分の距離だが、東山三十六峰の 車の行き交う東大路通りからわずか と、ふっと空気の変わる瞬間がある。

ゆるやかな坂道の参道を上っていく

し、新緑の木立に囲まれた泉涌寺(真言

一つ、月輪山(つきのわさん)の麓に位置



がふさわしい。

「ここ一、二年で女性の参拝者がぐっ

た空気に満ちており、寂静という言葉 宗泉涌寺派)は、真夏でもひんやりとし

に取り上げられたとのこと。何らかの 行の「パワースポット」としてメディア 殿学芸員)が語ってくれた。どうやら流 と増えました」と西谷功氏(泉涌寺心照 目するのはわからなくはない。 ストレスをリセットする場所として注 「パワー」を感じたい現代人が日頃の

時、宋にわたり、中国各地で律・禅・天 ほぼ同時代に生きた俊芿は、三二歳の じょう/二六六~三三七)だ。親鸞聖人と な功績を残したのは、俊芿律師(しゅん でさかのぼる。現在の寺域を築く大き ると、この地で戒律の復興を行った。 山の仙遊寺(泉涌寺の前身)を寄進され 台など諸宗を学んだ。帰国後、ここ東 泉涌寺の歴史は、鎌倉時代初期ま

ある。宋代の最先端の浄土教を、日本 の功績として忘れてはならないことが 実はもう一つ、入宋僧であった俊芿

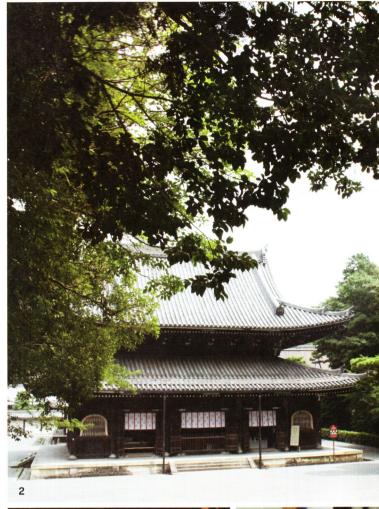
散歩メモ

泉涌寺は、鎌倉時代、宋代の浄土教を伝える本拠地 として知られていた。仏教の歴史書を執筆した東大 寺僧の凝然は、「浄教の所伝、泉涌を本とす」(『三国仏 法伝通縁起』)と述べている。俊芿のもとでは、長西など 法然門下の僧も多く学んだ。

泉涌寺周辺の歩き方

JR京都駅からタクシーで15分ほどだが、ぜひ徒歩を

1 塔頭寺院の一つ、悲田院の駐車場からは京都市内が一望でき る。隠れた名所だ。2月輪山を背景に建つ仏殿(重要文化財) 3 総門のすぐ手前に位置する即成院。4 本尊の阿弥陀如来(重 要文化財)と二十五菩薩。(写真提供:即成院) 5 毎年10月に行 われる二十五菩薩お練り供養。京都市内でも数少ない仏教儀礼 だ。事前の申し込みを行えば、参加も可能。(写真提供:西谷功) 6 [実は平安高校の出身なんですよ]と語る即成院ご住職の平野 師。7泉涌寺道の入り口に構える定食屋「祭」のランチメニュー。 ヘルシーなおばんざいがうれしい。専属契約の近江米をつかっ た炊きたてのご飯はお代わり自由。







帰はことごとく楽邦を指す」(『阿弥陀経 義疏』)と念仏往生をすすめる元照(10

に持ち帰ったことだ。「一乗の極唱、

終

多くの仏教者が登場する時代であった。 の枠を越え、お念仏のみ教えを伝える も、ひときわ印象深い。 を表現する。京都の年中行事のなかで つけた稚児たちがお練りを行い、 初秋、東山の峰々が色づく頃。浄土 親鸞聖人が生きた鎌倉時代。 宗派

四八~二二六)の思想は、俊芿によって日 塔頭寺院の一つだ。 土教の香りを色濃く伝える泉涌寺の 師が住職を務める即成院は、 雅章師(泉涌寺派教学部長)は語る。平野 性と深く関わっているんです」と平野 親鸞聖人もまたその一人である。 きな影響を受けることとなる。『教行 本にもたらされ、法然聖人の門流は大 菩薩の彫像が安置されている。 楽浄土からの来迎を表現する二十五 信証』に元照の著作を多く依用された 院には、本尊の阿弥陀如来を中心に極 毎年一〇月には、境内で菩薩装束を 源信和尚の創建と伝えられる即 お浄土の教えは私たち日本人の心 いまも浄

野呂 靖(教学伝道研究センター 研究員)

度、この地を歩いてみたい。

教の歴史に思いを馳せながら、もう



- ・まえがき
- ・第1章 まさか
- ・第3章 日常
- ・第3章 がん
- · 第4章 死
- · 第5章 牛
- ・第6章 そして
- ・あとがき
- ・遊雲と小児がんとの三年

この世の中で何が悲しいといっても、わが子に先立たれるほどの悲しみはない。病気であれ、事故であ れ、誰もがそういうことに見舞われないという保証はないのがこの世の生である。

だが、この本がすばらしいのは、まえがきにもあるとおり、「私たちはふつうならば嘆き悲しむしかない 出来事を『楽しんで』いられる」とおっしゃっているところである。そして、「死はすばらしいご縁ですよ、ご まかして内に抱え込んでしまうのではなく、かけがえのない『今』を照らし出してくれる外として、顔を上 げて出会っていきましょう」と結論づけていることである。

死を私と縁のないもの、とか、生の陰部として語るのでなく、生の「外」、生を輪郭づけてくれる外として とらえることを教えてくれている。

この本を読みながら、自分を重ね合わせていたが、とても自分にはできない一心さで我が子の重い問 題に取り組んでいかれた有国さんの真摯な姿と気迫がありありと伝わってくる本であった。

この本は、12歳(小学6年生)のご長男が小児がんを発病され、それから3年余りを父親としてお子さんと 共にがんと向き合って歩まれ、さらに、浄土真宗、親鸞聖人の教えをいただく僧侶という立場から子ども の死というものをどう受け止めていくかを苦悩しつつ問いつづけられた赤裸々な回想の書である。

著者は「がんのほんとうの怖さは、現実の痛みにではなくて、『死ぬかもしれない』という宙ぶらりんさ にある」と述べ、死を突きつけられることで、実は、はかなく脆いものだった生の本性があばかれたあや うい生に対するおびえである、ともいっている。

でも、彼は、切羽詰ったなかで、「でも、何があっても、大丈夫だからね」と口に出たという。「大丈夫だと 言ってくださるのは阿弥陀如来です。何があっても、大丈夫。そう口にできる環境――ご縁――を恵まれ ていたことに、ただ、感謝しました」とも述べている。

死は、人によって3通りの現われ方をするそうだ。死を通じて虚無に出会う人、自己に出会う人、そし て、仏と出会う人。そして、仏と出会うとは、「いのち」としての仏に会うことで、「死にたくない」というのは 「永遠のいのちと出会いたい」という意味の叫びだ、という。

ご長男、遊雲さんの言葉として「死ぬことをきちんと考えるつて、ほんとうはそんなに大変なことじゃな くて、今を精一杯楽しむつてこと」という言葉をあげ、遊雲さんを「かわいそう」がる必要などなかった、遊 雲さんは「死にかけて」いるのではない、いつもその時そのときにいのちを輝かせているだけなのだ、遊 雲さんが今、ただ生きて静かに確かにいのちを輝かせていることは、そのまま父さんのおびえでありおの のきであり、そしてそのまま父さんのいのちの輝きだった、という境地にたどり着いている。そして、親鸞 聖人の慚愧は、「わが生のただ中に、生きて生かされたおののきであり、喜びであったに違いない」、とい い、浄土真宗は、死後を問題にしているのではなくて、生者のための教えだ、ともいっている。著者は、この 出来事を通して、浄土真宗の教えの深さをも極めている点でも、是非ご一読をお薦めする本である。

評者/田中 教照(武蔵野女子学院学院長:武蔵野大学教授)

書籍紹介



竹内 整一 著

「かなしみ」の哲学 日本精神史の源をさぐる

日本放送出版協会(NHKブックス) 1,018円

倫理学・日本思想史を専門とする著者は、これまで「別れ」「はかなさ」等を主題として、日本人の精神史を読み解いてきた。本書では、「かなしみ」の感情に親和していくことで根源的なものにつながっていく日本人の思想性・精神性を、多様な文献を駆使して説き明かしていく。

まず、「人生は苦である」よりも「人生はかなしい」の方が、なぜ日本人の心を打つのか一という仏教にとっての重要な問いへの回答を示し、その後、「かなしみ」が「おのずから(無限性)」と「みずから(有限性)」の「あわい」に呼び起こされる構造を示す。「かなしみ」を有限性/無限性の感情として理解する立論の中には、日本仏教思想を理解するためのヒントが隠されている。



碑文谷 創 著

「お葬式」はなぜするの?』

講談社(講談社+α文庫) 780円

著者は、葬祭専門誌『SOGI』の編集長をつとめる葬送ジャーナリスト。本書は、その著者が、自らの体験と取材をもとに、現代における「死」や「葬儀」のあり方を論じたものである。

著者は、現在は人間関係が希薄となったことから「死が共同性を失い、個的な営みでしかない地平に追いやられ」ているが、死とは本来、死にゆく者と「看取るものとの共同の営み」であり、また、儀礼としての「お葬式」は、そうした看取りから始まるプロセスの中の「点」に位置づけられるものであるという。

著者が体験した数々の葬儀の事例が示す、「具体的な」一人一人の人間の「死」の多様性が、現代における「死」や「葬儀」のあり方について改めて考えるきっかけを与えてくれている。



丸山 顕子 著

いつちょんひげんの彼方 仏さまに出遇えてよかった

自照社出版 1,260円

「いっちょんひげん」とは著者の故郷の言葉で「何もかも嫌だ。全然面白くない。総てが辛い」という意味。著者は、自分は「望まれなかった子」だと思い込み、また父の死に際して自分のせいだという罪の意識を抱き、数回自殺を図った。本書は、そんな著者がやがて真宗カウンセリング研究会に出会い、劣等感から解放されていく過程を描いている。

教えに出会うことで、著者は「あぁ、阿弥陀様は、こんな私でもいい、と言って下さるんだなぁ」と感じ、「私が私であることを許されているという実感」を得た。著者は「絶望してもいいから、生きて、そこからやり直して欲しい。絶望は愚か者の結論かもしれないが、愚かでもいい」というメッセージを記している。

本願寺出版社 1890円

本願寺出版社 2100円 著者/大峯 顕 本願寺出版社 1260円 編者/勧学寮 探究社 840円 著者/村上 慈順 探究社 1600円 著者/姫路龍正 著者/姫路龍正

親<mark>鸞聖人</mark>著者/菊藤明道

仏教と宮座の研究 仏教伝承文化論考 著者/浦西 勉 自照社出版 1260円 曹和学」のいのち論 著者/田代 俊孝

自照社出版 840円

二十九歳の親鸞聖人 歴史を知り、親鸞 別 介

書店に聞く最近の仏教書

東京支所は膨大な情報が収集・発信されている東京に拠点を置き、情報の収集・分析作業などを行っています。その事業の一環として、より多くの人々が仏教書を親しみ、仏教への理解を深めてもらうことをめざし、近年刊行された仏教書を紹介する「仏教書レビュー」(前ページ参照)を行っております。

人々はどのような仏教書を求めているのでしょうか。これについて調査をするため、仏教書を販売している店員の方に、最近の仏教書の売れ行きを尋ねました。今回は、全国に店舗を展開している紀伊國屋書店新宿本店を訪れました。

ここ3年間の全国の紀伊國屋書店での売上ランキングは、適当な価格で持ち運びに便利な文庫や新書が中心となっています。『歎異抄』や『般若心経』、禅語に不動の人気があるようです。

また最近売れている仏教書は、『ダライ・ラマの「中論」講義』(大蔵出版) やスリランカ僧のアルボムッレ・スマナサーラ著『怒らないこと』(サンガ新書) とのこと。これに加えて、僧侶が書いた自己啓発本も売れているそうです。

さらに昨今のブームを反映した仏像関連書、これまであまり知られていなかった僧侶の生活や宿坊を紹介した書籍も関心が寄せられています。その他、年配の方を中心に、原典である仏典や各宗派の違いと要点を知ることができる書籍も恒常的に売れているそうです。

最後に「こんな仏教書があったら」という質問をしたところ、紀伊國屋書店の村上育世さんは「流行と教えの橋渡しをするような本」や「40代、50代の研究者が仏教の教えをわかりやすく書いた本」を望まれていました。

最近の仏教書の傾向は、読者にとって魅力的な人物の著書や、手軽に読めて具体的な生活スタイルを提示した書籍が人気を集めているほか、読者の趣味や関心事に結びついた書籍が注目されていることがわかります。また仏教の核心を学びたいという人も増えているのではないかと考えられます。

以上、今回の調査より人々が仏教書、さらに仏教に何を求めているのか、その一端が明らかになったのではないかと考えます。





人気のコミック『坊主DAYS』、『聖☆おにいさん1』を 手にした、紀伊國屋書店新宿本店の村上育世さん

近年3年間の全国紀伊國屋書店売上ベスト10

1	一日一生 (酒井雄哉)
2	Soka 2010 (聖教新聞社)
3	道元「禅」の言葉 (境野勝悟)
4	歎異抄をひらく (高森顕徹)
5	池田大作の軌跡 2 (「池田大作の軌跡」編纂委員会)
6	愚の力 (大谷光真)
7	私訳 歎異抄(五木寬之)
8	ふっと心がかるくなる禅の言葉(永井政之)
9	般若心経、心の「大そうじ」(名取芳彦)
10	怒らないこと (アルボムッレ・スマナサーラ)

提供:紀伊國屋書店

自死を

考える②

その思いを傾聴するためにその苦悩に寄り添い感じる時代

「寄り添う」「傾聴する」、言葉にするのは、じつに簡単です。かたちだけなら、それなりのことができるかもしれません。けれども実践するとなれば、これほど難しいことはないと痛感します。空気のように、ただ傍らにいるだけで、そこに安心感が生まれるとすれば、それはよほどの信頼関係があってのことでしょう。そうした人間関係や安心できる雰囲気をつくっていくためには、いくというコミュニケーションが大切です。人は、いくというコミュニケーションが大切です。人は、いくというコミュニケーションが大切です。人は、れる気持ちが整理されることがあります。

はじめて成立します。しかし、こちらから何もは「聴く」という行為は、相手の「語り」があって

受け止めたことを示す言動も必要でしょう。めなはたらきかけも必要ですし、相手の思いをります。とはいえ、多くの場合、聴き手が何もしづけることで、「聴くこと」が成立することもあづけることで、「聴くこと」が成立することもあ

ところが、心の状態がデリケートになっている意味を持ちます。

そして、思いを受け止めたことをどう伝えるかということも、そんなに簡単ではありません。かということも、そんなに簡単ではありません。かということも、そんなに簡単ではありません。かということができればいいのですが、ただしぐさだけで気持ちがこもっていなければ、それが相手だけで気持ちがこもっていなければ、それが相手だけで気持ちがこます。また、相手の言葉を繰りが小手先だけならば、「聴いていないこと」が相が小手先だけならば、「聴いていないこと」が相手に伝わってしまうかもしれません。素直な気手に伝わってしまうかもしれません。素直な気がっまくはいきません。みなさんも「これを言うかうまくはいきません。みなさんも「これを誤があると傷つけないだろうか」と躊躇した経験があると傷つけないだろうか」と躊躇した経験があると傷つけないだろうか」と

のではないでしょうか。

ところで「傾聴」とは、広辞苑に「耳を傾けてをくこと」「熱心にきくこと」とあります。そしと」という意味に加えて、「聞き入れること」「ゆるすこと」という意味に加えて、「聞き入れること」「ゆるす」は、「許可・承諾」といった意味合いであれば、そこに上下関係が前提されてしまいますが、援助的場面での「傾聴」は、そうした意味は持ち得ません。そこでの「ゆるす」とは、「こころをゆるす」「とがめだてしない」「認める」という意味でありましょう。

つまり「傾聴」するとは、相手を決して否定せつまり「傾聴」するとは、相手を決して否定せずに、相手の存在をそのままを認め、受け入れていく態度で、聴くことだといえます。そして相手いく態度で、聴くことだといえます。そして相手いく態度で、聴くことだといえます。そして相手のこれまで/これからの人生、いまの気持ちに同化するような気持ちで、耳を傾けていくことです。これには相当な労力を要しますが、苦悩する人にとっては、一生懸命に理解しようと聴いてくれる人がそこにいることによって、ふさがれたくれる人がそこにいることによって、ふさがれたくれる人がそこにいることによって、おきがいるりません。

いと思います。
次回も引き続き、「聴く」ことを考えていきた

武田 慶之(教学伝道研究センター 研究員)



一、お坊さんの危機

に行っているのでしょう。僧侶の本分と が生じています。一体、読経は何のため や、お坊さんの姿が消えるという事態 は何なのでしょう。 近年、お葬式の会場から、読経の声

二、わが身を賀茂川の魚に

のように考えたら良いのでしょうか。 ような親鸞聖人のお言葉が記されて う。『改邪鈔』(覚如上人著)の中に、次の 先ずは、お聖教を紐解いてみましょ 私たちは、お葬式の意味について、ど

某 て魚にあたふべし。 親鸞閉眼せば、賀茂河にいれ

『註釈版聖典』九三七頁

は、本願他力の教えを明らかにしてく 衝撃を受けられたことでしょう。それ 当時の門弟や門信徒の方々は、大きな 恐らく、この聖人のお言葉を聞いて、

> ださった聖人の亡骸を賀茂川の魚に与 でしょうか。 す。このお言葉の真意はどこにあるの えるなど考えもしないことだからで

三、最も大切なこと

何なのでしょうか。右記の文章に続 て、次のように説かれています。 聖人にとって、最も大切なことは、

喪葬を一大事とすべきにあらず。 これをもつておもふに、いよいよ をあらはしましますゆゑなり。 て仏法の信心を本とすべきよし これすなはちこの肉身を軽んじ もつとも停止すべし。

(『註釈版聖典』九三七頁

とが誤りであると示されています。 われたお葬式が一大事のように思うこ るということに心を傾けず、形にとら も、阿弥陀仏に等しく摂め取られてい すなわち、故人も後に遺されたもの

四、親鸞聖人の最

れています。 伝鈔』(覚如上人著)に、次のように記さ 聖人の臨終時のご様子について、『御

旬の候より、いささか不例の気ま 聖人(親鸞)弘長二歳 します。それよりこのかた、口に 壬戌 仲冬下

> 世事をまじへず、ただ仏恩のふか さず、もつぱら称名たゆることな きことをのぶ。声に余言をあらは (『註釈版聖典』一〇五九頁

います。 ら慶ばれているというお姿が示されて はたらきのなかにあることを、ひたす ています。ここには、阿弥陀仏の本願の ては、お念仏を申されていたと記され 阿弥陀仏のご恩の深いことを述べられ で、世間話を一切されることなく、ただ 聖人は、生涯を終えられるその時ま



『親鸞聖人絵伝』(滋賀県大津市

五、お葬式の意味

す。では、どのような意味で、お葬式が 式の様子は、『御伝鈔』に記されていま 聖人のご往生の後に行われたお葬

執り行われたのでしょうか。

いえます。 であうという意味において行われたと た人生の帰趨を阿弥陀仏の浄土に見 対して報恩感謝の思いをめぐらし、ま 陀仏に等しく摂め取られていることに に、聖人も後に遺されたものも、阿弥 すえて歩ませていただくという法縁に それは、聖人のご遺徳を偲ぶととも

六、僧侶の本分

いえるでしょう。 のお言葉に触れるという意味があると 伝えてくださった親鸞聖人や七高僧 仏のお心に、そして、それを私たちに すから、読経には、このような阿弥陀 め取られていると説かれています。で たちが、阿弥陀仏の本願のうちに、摂 お経には、生死の苦悩の中にいる私

であると心得なければならないでしょ 教えを広く説き示すことが、その本分 阿弥陀仏のお心を体して、本願他力の 日、お葬式に携わる私たち僧侶は、聖 人のお言葉の意味を真摯に受け止め、 葬式不要論が公然と語られる今

佐々木 義英(教学伝道研究センター 常任研究員)



仏教と看護〈2〉

看病する比丘のなすべきこと

今回は律蔵に見られる看病のきまりを紹介したいと思います。看病する比丘(以下、看病 比丘)には、大小便の処理を厭わずできること、病気に応じた薬・食事を与えること、慈し みの心で看護することなどが、看病の際に要請されます。これらに加えて、「説法し喜ば せること」も看病比丘に要請されます。これは仏教ならではの看病のきまりと言えるでし ょう。このきまりについて詳しく見てみましょう。『十誦律』に次のような記述があります。

看病比丘は、いつでも病人のところに行き、深遠な教えと正しい道と過った道を説いて、智慧を起こさせるようつとめなければならない。比丘は次のように心がけて説法しなさい。もし、人里離れた場所で修行する者が病の場合には、病気の比丘(以下、病比丘)のもとを訪れ、辺地での行について讃嘆しなさい。経を学ぶ者だったならば、経を学ぶことを讃嘆しなさい。もし、律を学ぶ者だったならば、律を讃嘆しなさい。もし、法師(説法をなす人)だったならば、法義を讃嘆しなさい。もし、僧団運営の雑事をなすならば、僧団運営の雑事をなすことを讃嘆しなさい…。

この記述からは、病比丘がこれまでに学んできたこと、やってきたことを讃嘆する説法が看病比丘に期待されていることが分かります。客観的事実や真理、あるいは看病比丘が得意とする説法が看病の際に要求されているわけではありません。相手の今までの人生を語り、深めていく内容の説法が要求されているのです。

また、看病比丘に説法が課せられていることからは、看病の場が、単に病気治癒の手助けをする場ではなく、病気の人と看病者が互いに協力して仏教理解を深めていく場であると分かります。いま、「互いに協力して」と言いましたが、これは仏教における看護の一つの特徴になります。次回はこのことをもっと詳しく知るために、病比丘の義務について、紹介していきたいと思います。

鈴木 健太(北海道武蔵女子短期大学 講師/元教学伝道研究センター 研究助手)

毎日が生前葬?

本願寺では生前葬をどう考えるのか、という質問が時々あります。

結論だけなら単純です。本願寺派の規範に「生前葬」という名目の法要はありません。が、それだけ答えて門前払いと思われては残念です。規範に無いことは承知の上で、浄土真宗なりの生前葬の意義を考えてみることにしましょう。

そこで大切なのは、質問者がどのような気持ちで生前葬を捉えているのかを、具体的にお聞きすることです。例えば、「死後の葬儀で家族に負担をかけたくないから代わりに生前葬をしたい」という方がいました。ご家族への思いやりが感じられます。しかし、実はそのような方にこそ、生前葬は死後の葬儀の代わりにはならないということを明確に伝えなければなりません。

私たちが身近な人の死を受け入れてゆくためには、まずはきちんと悲しむことが必要だといわれています。その、きちんと悲しむ場として、葬儀は重要な役割を担っているのです。生前葬でも、ある程度は将来の悲しみを想像できるかもしれません。しかし、いざ死別が現実のこととなれば、想像したのとは比べものにならない悲しみに直面します。その時、生前葬をしたから死後の葬儀は無用としてしまうと、きちんと悲しむ場が失われ、ご家族を思いやったつもりが、逆に精神的に無理をさせてしまう可能性すらあるのです。

また、「今のうちに供養してもらえばいつ死んでも安心」と生前葬を希望する方もいます。浄土真宗の葬儀は冥福のための追善供養ではありません。この方はそれを誤解しているわけですが、一方で、後生の一大事をご自身の上で受け止めている、と見ることもできます。実は真剣に仏法を求めているそのような方に、生前葬をきっかけにして懇切にお取り次ぎができるというのは、まことに得難いご縁なのではないでしょうか。

結局、浄土真宗なりの生前葬の意義というのは、入仏法要や初参式などといった種々の法要・儀式の意義と変わらないことに気付かされます。すなわち、様々な節目において、この私が仏法を聞き味わわせていただく法縁であり、仏恩報謝の営みなのです。「生前葬」という名目によって、自分自身の生死の問題により強く心が向くことはあるかもしれません。ですが、よく考えてみればそれは本来、浄土真宗の法要・儀式全てに共通する重要な意義のはずです。

蓮如上人はお正月の挨拶に訪れた門弟の道徳に、「道徳はいくつになるぞ。道徳念仏申さるべし」(『註釈版聖典』1231頁)と仰せになりました※。このお言葉を、生前葬について考えながら味わうと、私たちの人生、お正月であろうがいつであろうが毎日が生前葬なのだぞと教えられているようでもあります。

(「いのちと念仏」相談センター)

※『拝読 浄土真宗のみ教え』38頁「折々のことば お正月」参照。 なお、数え年の場合は誕生日に関係なく1月1日に1歳年をとります。

■ シンポジウム開催・参加 報告

私たちのいのちとは、誕生のときだけではなしに、 自立して生きていると自分で思っているときでも、そして死んだあとでも、 他者によって与えられ、支えられているのです。 (鷲田清一氏の基調講演より)

2010年2月5日(金)、自殺対策フォーラム「生きることの支援ーいま、京都からの発信ー」が、聞法会館にて開催された。当日は400人を超える参加者があり、新聞・テレビなど各種メディアでも取り上げられるなど、大きな反響を得た。

このフォーラムでは、前原誠司氏(衆議院議員)をはじめとする4名の方から寄せられたビデオメッセージの上映、鷲田清一氏(大阪大学総長)の基調講演、それらを受けて、自殺対策に関わる専門家によるパネルディスカッションが行われた。

「自らいのちを絶った人と、そして絶たなかった私たちの間に決定的な差異って本当にあるのだろうか」「私たちにとって、自らいのちを絶った方の死は、決して他人の死ではないのではないか」と語る鷲田氏からは、臨床哲学の立場から、自死という枠を超えて「他者との関係のなかで生きる」ということについて、お話いただいた。

真名子 晃征(教学伝道研究センター 臨時勤務員)

※自殺対策フォーラムの詳細については、ブックレットとして2010年度内に発刊予定です。

教団付置研究所懇話会 生命倫理研究部会 報告

2010年6月4日(金)、大本東京本部にて教団付置研究所懇話会・生命倫理研究部会が開催され、清水哲郎氏(東京大学大学院教授)より、「尊厳あるいのちの最期のために-安楽死・尊厳死問題とその周辺」と題する講演が行われた。

清水哲郎氏は、医療現場の孕む諸問題に対して、臨床的かつ哲学的な立場から貴重な提言をされてきた。その基本姿勢は「医療現場に臨み、そこで活動する方たちと共に考える」というものである。今回は、臨床的な視点から「尊厳死」「安楽死」についてご講演いただいた。

清水氏は「尊厳死」を「尊厳をもって最期まで生きる」「尊厳ある生を生き抜く」(dying with dignity)と定義された。その上で、尊厳をもって生き抜くために終末期に何が希望となるかを問われた。終末期は病気が改善する可能性が閉ざされ、生きる希望が持ちにくい。そこで清水氏が提案されたのが、「自分を肯定する」「他人によって肯定される」である。すなわち「今の自分を好き」と言え、その気持ちが「共に生きる人々の輪」によって支えられ、そこに希望(=前向きに生きる)が生まれるのだ、と。

僧侶はご高齢の方に接する機会が多く、「生きていても仕方ない」「早くお浄土へ行きたい」 という声をしばしば聞く。そんな方々の声に応えていく処方がここに隠されてはいまいか。

藤丸 智雄(教学伝道研究センター 常任研究員)

野恵

3 增 は 葬 事 コ 迷 岐 ご遺 され つつつ える 惑、 して お it 5 儀 流される葬 儀 内 7 カジ 近 丰 新 葬 希 てみ 爺 0 20 毎 だろう 容の 年. 仰つ あるようだ 元 永 族 たお 儀 ちゃ 薄 経 年 個 供 る 3 葬 不 代供 る 程 分 どう 13 化 は 変 費 Ŧi. 一なのだろう 人 養 満 んと 爺爺ち か? の会葬 儀 220 葬 化 0 11 全 儀だろう やら葬 養 関 体 散 件 儀 \$ ij 連 0 裏であ 形 P どの I - を超 0 見 骨 「ご縁 紙 0 者を予 安 1 あ 0 演 骸 形を話題 5 人の 0 めるお が多 フケ 4 記 出 儀は変 化 逆 n わ えている 事 葬 紙 か?家 Iにとど 分 事 る ーミング へとへ は る 故 中に多 ず 0 会 は 儀 を 想 宅で90歳でご 5 から 記 人 葬 か が話 高 して 葬 形 話 化 直 とす 連 **族だけ** 0 とに 載 自 者 まるなら、 齢 儀 式 0 葬 好 数 H 数 年 一分ら 題 葬 局 化 が 的 お る記 内 ~を合 なり 歴となっ きな音 紙 帰 見 0 皆 儀 面 家 布 自 容も 5 九 t 間 + 5 から 族 ト 施 形 カミ 間 n 事 年 13 計 东 れ 分 楽 B 莚 関 骸 あ る 記 1 賑 は T

丸 智雄 (教学伝道研究センター 常任 研

まうことになるだろう

事

情

に表

れ

ている重

生要な

問

題

を見

た失って

ŦIJ 物 案



季刊せいてん

編集: 教学伝道研究センター 本願寺出版社刊 700円

聖典拝読の手引に、グループ 学習のテキストに適した、浄 土真宗の教えを読んで味わう 学習誌。



自死、遺された人たち(2) 求められる宗教者の役割

編集: 教学伝道研究センター

本願寺出版社刊

[別離の悲しみを考える会]の記録。リメンバー名古 屋自死遺族の会の鷹見有紀子さん、北千住旭クリ ニック院長の平山正実さんの講演を収録。遺族の心 情に思いを馳せ、葬儀や日々の法務での僧侶のあり 方を問う。悲嘆感情によりそうことの難しさと大切 さを考えさせられる一冊。

儀

新センター所長あいさつ

浅井成海先生が6月はじめに急逝され、残念に思いま す。その後を受け継ぐようにと、所長を拝命いたしまし た。まったく晴天の霹靂という思いを強くしています。

しかし、本研究所が、親鸞聖人の深いみ教えを現代社 会に生きる多くの方々に伝えるために、教義内容のみな らず、現代の宗教事情、社会問題などの研究や出版物の 発刊などをすすめていることは、本願寺派のシンクタン クとしても、また布教伝道の柱としても、重要な場である と考えています。その意味で、本研究所の研究活動がま すます充実し発展するよう、微力ながらつとめなければ と思っている次第です。

今後とも、みなさまのご指導、ご支援をお願いいたし ます。

佐々木 惠精(教学伝道研究センター 所長)

浅井成海前センター所長(聞思院釋成海)は、2010年6月 6日、往生の素懐をとげられました。

新センター所長のもと業務に励んでまいります。

所長あいさつ

「葬式仏教」と揶揄される日本の仏教が、今や「葬式」 さえ人々の心から離れつつあると言われています。お通 夜やお葬式が、それがたとえ社交儀礼だとしても、今ま で仏縁のなかった人にとって、み教えに触れる数少ない 機縁ですから、それが失われていくことに危機感を覚え ます。宗教や仏教に意義や必要性を見出せないからでし ようか。

仏教や真宗の教えがなぜ必要なのでしょう。それに は、まずその魅力に実際に触れてもらう事が大事かもし れません。いくら「おいしいよ」と勧めても、その本当の おいしさは、実際に食べて貰わないとわかりません。

肩ひじ張らずに読めて、それでいて、その中にこもって いる真実に触れて、心が動かされる。そういう実感が必 要でしょう。当センターではその様な素材を、これからも さまざまに提供していきたいと願っています。ご住職方 のご活動の一助となるよう努力してまいります。今後と もご理解とご協力をお願いいたします。

満井 秀城(本願寺教学伝道研究所 所長)